



# 「南京を考える旅 2025」報告書 ～平和はぬくもりと希望を伝える～

2025年9月21日(日)～9月25日(木)

主催:中国 YWCA・日本 YWCA

共催:南京 YWCA



# Table of Contents

はじめに (F.S.)	03
スケジュール	04
9月21日	
オリエンテーション (M.Y.)	07
9月22日	
開会式 (M.Y.)	08
基調講演 (円卓対話) (H.A.)	09
グループ1: 南京YWCA 華僑慈恩障害者の家 (H.P.)	11
グループ2: 愛徳パン工房 (Y.R.)	13
グループ3: 愛徳・好来屋コミュニティ在宅高齢者サービスセンター (T.S.)	17
特別講演 (Y.C.)	19
9月23日	
南京大虐殺記念館・式典 (Y.K.)	22
慰安所旧跡陳列館 (C.Y.)	25
国際安全区資料館 (Y.T.)	28
グループ別シェア I (S.R.)	31
9月24日	
グループ別シェア II (T.Y.)	32
閉会・平和行動計画 (Y.A.)	34
まとめ・日本YWCAとしての今後 (F.S.)	36
旅の感想文	37

---

## はじめに

---

F.S. (日本 YWCA 代表理事)

抗日戦争勝利 80 周年記念の 2015 年 9 月に、2018 年から 8 年ぶりに、「南京を考える旅」が実施されます。

『南京写真館』や『731 部隊』と、映画も上映され、再開にむけて企画提案された中国 YWCA にとっても、ともにこの旅に参加者を募る日本 YWCA にとっても、これまでにない、緊張感をもったプログラムとして準備をすすめてまいりました。

しかし、2007 年から始まった、「南京を考える旅」は、これまでの 4 回のいずれの回においても、常に緊張感のあるプログラムであったかもしれません。

残念ながら、日本はいまだにアジア・太平洋戦争で日本軍が他国に与えた痛みや被害を認めようせず、真摯に受け取ることすら拒絶しています。むしろ、平和とは真逆の方向に進もうとしていることに、危機感を覚えているのは、日本以上に、中国の市民も感じているのではないのでしょうか。

そういう時だからこそ、過去に起こったこと、真実を可能な限り五感で感じることを意識し、行動にしていくことが必要です。インターネットやマスメディアにあふれる、意図的に操作されている情報ではなく、自らの体感を通して理解していくことにこそ、この旅の強みがあります。

限られた時間の中でありながらも、受け止めるには重すぎる事実を知ることになるでしょう。そして、その事実を受け入れること、さらに、その上で、自らが平和のために何ができるかを考えるきっかけとなる、平和の種をまく旅が、始まります。



## プログラム・スケジュール

9月21日(日)	
午後	南京到着 ホテルチェックイン
19:00~20:30	1. 歓迎夕食会 2. アイスブレーキング 3. オリエンテーション 4. 旅に期待することのシェアリング
9月22日(月)	
08:30~9:45	開会式 1. 開会シェア 2. 「共に平和の時代を思い起こす」記念ビデオ 3. 開会挨拶 4. 記念写真撮影
09:45~10:15	「共に平和の美しい絵を描く」作品鑑賞 ティーブレイク
10:15~11:45	基調講演(円卓対話) テーマ: 平和と未来 質疑応答・交流
12:30~13:30	昼食
14:20~16:30	グループ別サービス体験 グループ 1: 南京 YWCA 華僑慈恩障害者の家 グループ 2: 愛徳基金會「愛徳パン工房」 グループ 3: 愛徳・好来屋コミュニティ在宅高齢者サービスセンター
17:00~18:00	夕食
19:00~20:30	特別講演 テーマ: 歴史と平和 質疑応答・交流



9月23日(火)	
08:00～10:00	南京大虐殺遭難者記念館・式典
11:00～11:45	昼食
12:30～13:15	国際安全区ラーベ旧居
14:00～15:30	グループ別シェアⅠ 1.基調講演・特別講演・現地見学の感想・体験、日中 YWCA における平和に対する理解と行動のシェア 2.平和はどのような面に表れるか
16:00～17:30	南京利濟巷慰安所旧跡陳列館
18:00～19:00	夕食
19:30～21:00	閉会式の合唱練習
9月24日(水)	
09:15～10:00	「共に平和の時代の音を述べる」平和への思いの共有
10:00～11:30	グループ別シェアⅡ 1.基調講演・特別講演・現地見学の感想・体験、日中 YWCA における平和に対する理解と行動のシェア 2.「平和行動計画」準備
12:00～13:00	昼食
14:00～16:40	閉会式 1.各グループ単位での「平和行動プラン」発表 2.「共に平和の美しい絵を描く」優秀作品の発表 3.総括講演 4.謝辞 5.「共に青春の華やかな章を歌う」全員で合唱 6.記念写真撮影
18:00～20:00	送別夕食会
9月25日(木)	
終日	帰国

※本報告書では、中華 YWCA 全国協会(正式名称)を「中国 YWCA」と表記しています。



# Day 1 「南京を考える旅」の幕開け

## September 21



### オリエンテーション

M.Y. (名古屋 YWCA 会員)

ロビーでの温かい歓迎を受けた後、到着した日の夜にホテルのレストランスペースでさっそくオリエンテーションが行われました。席は、今回の旅をともに過ごすグループのメンバーごとにわかれしました。

流れとしては、まず初めの挨拶として YWCA 参加青年の司会者が自己紹介したあと、中日 YWCA 総幹事による言葉があり、「短い時間ですが楽しみましょう」と締められました。そしてバイキング形式での歓迎会食が始まり、ある程度お腹が満たされたところにアイスブレイクとしてビンゴゲームを行いました。ビンゴゲームは、「一番好きな季節」「よく着る服装のスタイル」などの項目を記入し、同じ回答をした人を見つけていくルールでした。ビンゴになった人は小さなプレゼントをもらいました。また、開催月に誕生日の人が 8 名いたため、サプライズとしてケーキがふるまわれました。

最後に、スケジュールの説明や約束の共有、宣誓文の練習を行いました。また、今回の活動への期待をグループで共有し、解散しました。





### 開会式

M.Y. (名古屋 YWCA 会員)

2日目の朝は、美しい西洋風の建物である芸術金陵音楽堂で行われました。会場に着いて最初に私たちを出迎えてくれたのは、中国と日本の各地域の YWCA に所属する人々による平和への願いを込めた色とりどりの絵「共に平和の美しい絵を描く」作品です。天候にも恵まれ、これから始まる私たちの南京での旅をわくわくさせるものでした。

開会式は、はじめに各国代表者による挨拶と動画視聴が行われました。司会は中華 YWCA 全国協会の帰総幹事がつとめました。

まず、中華 YWCA 全国協会会長である姜会長の挨拶です。姜会長は、遣唐使から始まる 2000 年以上の友好の歴史に触れ、過去から学び未来に繋げる大切さを訴えました。そのなかで、日中平和条約をきっかけとして活発になった青少年交流において、寛容さと強靭さを持つ若者の活力でより良い未来を目指し、真の平和は身の回りの互いの理解から生まれることを参加青年たちに伝えました。そして、平和への道は平坦ではなく不断の努力で実現するものであり、平和への積極的な貢献者になってほしいという言葉で締めくくられました。

次に、動画の視聴がありました。動画のタイトルは「共に平和の時代を思い起こす」で、両国の YWCA メンバーによる平和についてのメッセージです。平和とはなにか、もし平和がなかったらどうなるのか、それぞれの想いが語られた心があつくなる動画でした。過去のプログラムの様子も垣間見え、これからの旅の想像が膨らみました。また、YWCA の活動内容や理念についても分かりやすくまとめられていました。個人的に、この動画についての司会者コメント「平和とは心の中のロマンティックを集めるもの」という言葉が印象に残っています。この動画も中国の YWCA メンバーが作成したものということで、非常にクオリティの高い出来栄でした。

続いて、日本 YWCA 元会長の藤谷さんのご挨拶です。2007 年に中国 YWCA から「南京を考える旅」についてのプログラムが提案され、これは対話による平和活動であり、参加者一人一人の経験が種になっていつか実を結ぶ「種まきの旅」であると話されました。そして、草の根レベルの交流が活発にこれからも続くことを願って締めくくられました。

挨拶のあとは、30 分間の休憩時間がありました。この時間は、両国参加者が持ち寄った様々なお菓子や果物が振る舞われ、たくさん交流もして、とても楽しい時間でした。また、私たちを出迎えてくれた「共に平和の美しい絵を描く」作品の鑑賞もゆっくり行うことができ、それぞれが思い思いの時間を過ごしました。

## 基調講演(円卓対話)「平和と未来」

H.A. (横浜 YWCA 会員)

基調講演では、胡さん、花さん、李さんの三名がパネルディスカッション形式で講演を行った。講演テーマは「平和と未来」。まずはじめに、講師プロフィールと、パネルディスカッションで議論された内容のポイントを下記に列挙し、それを受けた私の感想を述べさせていただきます。

### 【講師プロフィール】

- 復旦大学 胡令遠教授
- 中華 YWCA 全国協会理事 花菊香教授
- 全国青年連合会常務委員 李石さん

### 【講演内容のポイント】

- 平和と対話
  - ・平和に対して理性的に、建設的に議論することが大切である
  - ・穏やかさを保ち、家族や友人に伝えることで平和を拡大することができ、コミュニティ構築につながる
- コミュニティの持続可能性、平和とは
  - ・中国の言葉「他人に善を与える」
  - ・コミュニティの中で「個」が大切であり、尊重することが大切である
  - ・意見が分かれた際は、矛盾を見出しそれを解決することに焦点をあてる
  - ・議論する際、まず初めに共通目標；ビジョンをたてることが大切である
  - ・自分の痛みを解決してから他人の痛みを共感し解決することができる。自分の安寧や余裕があってこそ、人への助けにつながる
  - ・コミュニティはトラブルが多い。その対応方法としては三つあり、①協議して解決する、②法的手段、③喧嘩。いかに③を避け、②を最小限に抑え、①に持っていくか。①のためにソーシャルワークは大切である
  - ・若い世代のリーダー育成が大切。平和の担い手である。発信も含めて期待する
  - ・異なるバックグラウンドを持つコミュニティの交流は重要。違う箇所があるからこそ互いに学び、それを持ち帰って団体のより良いコミュニティ運営に生かすことができる

- ・小さいコミュニティ間でも、国家間でも、相手の優先順位の高い項目に対する敬意を持ち、配慮することが大切である

●日中間の平和のために何が必要か

- ・グローバル化のなかで草の根での交流活動が必要である
- ・平和を求めると同時に衝突もある。それを修復するか、再構築するか。それをするために交流が必要である
- ・学校教育のなかで、平和と結びつけて実践をすることが重要である
- ・昨今の国家主義・軍国主義、極端主義の蔓延のなかで、幼少時代から平和に対する教育や人に対する包容の考え方が重要である
- ・世代ごとの交流は意義が異なる。若者は感覚が柔軟で、頭の回転が速いので、若いうちの交流が将来の平和に寄与する

●背景が異なる対話をするうえでの場面設定

- ・新しい要素を取り入れること：文化的なもの（2次元の文化）、新しいテクノロジー

上記の講演を伺い、とりわけ「平和」という共通目標のなかで、多くの分野での市民参画、対話、ソーシャルワーキングの重要性を改めて認識した。本プログラムの序盤でこのお話を聞いたからこそ、本プログラムで日中の市民活動を積極的に行う参加者と対話ができることをうれしく、楽しみに感じた。

講演内容から新たに感じた課題としては、日本において実際にそういった活動に参画する若い人はほんの一部であるということである。特に若い人においては、自分たちが行動しても、どうせ社会は変わらない、どうせ自分たちの声は聞いてもらえないという悲観的な意見も多いと感じる。実際、日本の若者の選挙の投票率は低い。この状況を変えるためには、自分たちの手で「社会は変わる」という成功体験が重要だと考える。その点で、中国では、どのように多くの人、特に若者を活動に取り込んでいるか。また、行動をとった若者たちの社会の受け入れ態勢の状況はどうか、共に行動するシステムがあるのか、引き続き学びあいたいと感じた。





### グループ 1: 南京 YWCA 華僑慈恩障害者の家

H.P. (日本 YWCA ボランティア)

As part of the Peace Pilgrimage to Nanjing program, my small group chose to visit the 南京 YWCA 華僑慈恩障害者の家. This is a partly YWCA-run daytime care facility for disabled people of 16 to 59 years old, so mainly adults.

We first received an introductory presentation on the home for the disabled: we learned how the facility is run and about its main activities, which include physical exercises and crafts. The home also supports working life through a small bakery run by the people receiving care, and by selling handmade crafts. All of us were truly impressed by how beautiful and high-quality the crafts were.

While the day home and its activities were introduced, we also learned about some basic but important experiences of disabled individuals. For example, we learned how physical exercise can be especially meaningful for them in gaining a sense of control over their own bodies. We also heard about how emotional challenges are supported by learning to express feelings and thoughts in simple ways. As a non-disabled visitor, this was valuable to learn.

From both our visit and my later discussion with the teacher, it felt like the care at this facility is very holistic. Not only are the “patients” taken care of, but there is a real effort to empower the people there and connect them to society. Interaction and understanding between the disabled and non-disabled is clearly a focus. We were told the day home had also provided some activities to relieve the stress of caregivers, which showed how widely their care reaches.

The most meaningful part of the visit was meeting the people at the facility and working together with them. We were paired up and asked to create a stitched picture of a dove on fabric using colorful threads. The atmosphere was friendly, lively, and sometimes a little chaotic in a fun way. In the end, the only real difficulty was the language barrier between Japanese and Chinese. Watching how carefully and skillfully my partner worked, it became completely clear why the crafts we had seen earlier were so impressive.

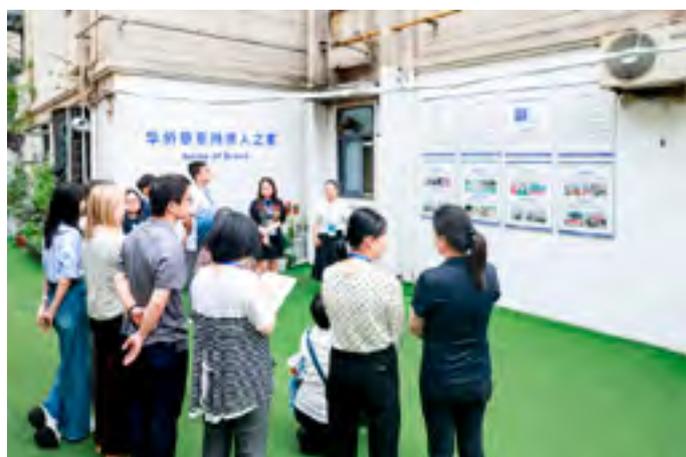
This visit left a strong and warm impression on me, and I am very grateful that we had the chance to experience it firsthand.

「南京を考える旅」プログラムの一環として小人数のグループで南京 YWCA の華僑慈恵障害者の家を訪れました。これは YWCA が運営に関わっている障がい者のためのデイケア施設で、16 歳から 59 歳までの方が利用されています。まず最初に障がい者の家を紹介するプレゼンテーションを聞き、施設の運営の様子や、運動や手芸などの主要な活動内容について学びました。施設では利用者が運営する小さなパン屋や手づくり品の販売を通じて障がい者の就労を支援しています。私たちは皆、手づくりの作品がとても美しく質の高いことに感銘を受けました。

施設と活動についての紹介を聞いて、障がい者の方の基礎的で大事な経験についても学びました。例えば、運動は、障がい者の方にとって、自分たちの身体をコントロールする感覚を養う上で非常に重要なのだそうです。さらに、感情的な困難があっても、シンプルなやり方で気持ちや思いを表現する方法を学ぶことで対処できるといいます。非障がい者の一人として、これは貴重な学びでした。

施設訪問と後の先生とのディスカッションを通じて、この施設のケアがとても総合的なものであると感じました。障がいのある方々を単に「患者」として世話をするだけではなく、エンパワーし、社会とのつながりを持たせようと真剣に取り組んでいるのです。そのための核となっているのは、まさしく障がい者と非障がい者との交流と理解です。デイケア施設では介護スタッフのストレスを緩和するための活動も提供していると聞き、とてもケアが行き届いていると思いました。

訪問で最も意義深かったのは、施設を利用されている方々と会い、一緒に作業をしたことです。パートナーと二人組になって色とりどりの糸を使って布に鳩の絵をステッチしました。はしゃぎすぎて、ちょっぴり收拾がつかなくなったりしましたが、終始気さくで、にぎやかな雰囲気の中で作業が行われました。唯一大変だったのは日本語と中国語の言語の壁だけでした。私のパートナーの慎重で器用な仕事ぶりを見て、初めに見た手づくり品が素晴らしいわけがはっきり分かりました。今回の訪問は心に強く温かく残りました。直接このような体験をする機会を得られたことに心から感謝しています。 (翻訳：Y.A.)



## グループ 2: 愛徳パン工房を訪れて

Y.R. (京都 YWCA 会員)

京都 YWCA ユース会員の Y.R.です。今回、9月22日の「南京を考える旅」2日目に訪問した愛徳パン工房について、レポートというより、ひとつのエッセイとして感じたことを書いてみたいと思います。

私はこれまで半年間、中国に留学していたことがあり、上海や成都、各地の街を歩きましたが、「障がいのある人」と出会った記憶がほとんどありませんでした。もちろん「いなかった」のではなく、私の視界に入っていなかっただけです。中国社会の中で、障がいのある人たちがどのように暮らしているのか、どのような支援があるのかを考える機会もほとんどありませんでした。だからこそ、今回、南京で障がい者支援の現場を自分の目で見る事ができたことは、とても貴重で、そして少し自分の偏った視野を突きつけられる経験でもありました。

### 黄色いパン屋さんに入店！

バスが止まると、最初に目に飛び込んできたのは、明るい黄色の外壁をした小さなパン屋さんでした。遠くからでも「あ、あそこだ」と分かるような、かわいらしくて、どこかあたたかい雰囲気。ドアの方へ近づくと、ふんわりと焼きたてのパンの香りが広がってきて、「ここは本当に“支援施設”というより、まぎれもなく“街のパン屋さん”なんだ」と感じました。



【左】 愛徳パン工房外観の様子と



【右】 温かい演奏の様子

入口のそばには、ゴッホの絵をモチーフにしたような二つの作品が飾られていました。あとで説明を聞いて驚いたのですが、これは知的障がいのある人たちが塗り絵として仕上げた作品だということでした。店内に入ると、スタッフの方々が笑顔で迎えてくださり、すぐにピアノの演奏が始まりました。曲はジブリの『夏』で、とっても美しかったです。演奏していたのは、知的障がいのある男性で、「ピアノは小さいころからずっと自分の友達だった」と紹介されていました。その言葉を聞いた瞬間、彼にとってピアノは「特技」以上の、大事な居場所なのだろうと感じました。私たちが拍手をすると、彼は少し照れたように笑いながらも、誇らしそうな表情をしていました。その姿を見て、「ここは“できないことが多い人”として見る場ではなく、“できること・好きなことを土台に関係が結ばれる場”なんだ」と直感しました。

### 「魚を与えるのではなく、漁を教える」という支援

二階の作業場に行くと、映像資料を見せていただきました。愛徳パン工房は、アムネスティによって設立された社会企業で、2007年から知的障がいのある人たちに職業訓練と就労の場を提供してきたそうです。印象に残ったのが、「人に魚を与えるのではなく、漁を教える」という言葉でした。ただ生活を「助ける」のではなく、自分の力で働き、社会の一員として参加できるようにする。そのための長期的な職業訓練がここでは行われています。映像の中で、職員と「喜憨児（知的障がいのある人への愛称）」と呼ばれる若者たちが、一緒に生地をこねたり、クッキーの型を抜いたりしている姿は、とても穏やかで、本当に雰囲気良かったです。パンだけでなく、月餅やコーヒーといった商品も増え、デザートテーブルのセッティングなど、対面サービスの技術を身につけている人たちもいると紹介されました。彼らの職業能力が伸びることで、社会の一般企業、たとえばピザハットやレストランなどで働き始めた人もいます。その説明を聞きながら、「支援のゴールは“ここで一生守ること”ではなく、“社会へと開かれた道と一緒につくること”なんだ」と感じました。

また、特に印象に残ったのは、接客を担当しているフージョンさんの存在です。彼は13年間ここで働き、常連客一人一人の好みを覚えていると紹介されました。「あのお客さんは渦巻きパンが好きだからこれをすすめる」といった言葉から、お客さんとの信頼関係を大切にしていることが伝わってきました。彼は単に「パンを売る人」ではなく、「お客さんとの関係をつくる人」として働いているのだと思いました。見学の合間に一緒にキューブ型のパズルで遊ぶ場面もあり、私はあっさり負けてしまいましたが、そのときそこにあったのは「障がい者と見学者」という関係ではなく、「一緒にゲームを楽しむ仲間」という空気でした。こうしたささやかなやりとりが、「障がい者」というラベルを外し、目の前の一人の人として向き合う感覚につながっていくのだと感じました。



【左】 バッジづくりの様子と 【右】 パンの商品の様子

半年間の中国留学を振り返ると、私は大きなショッピングモールや観光地、大学キャンパスなどさまざまな場所に行きましたが、障がいのある人たちの姿を意識して見ることはほとんどありませんでした。それは、私自身のアンテナの鈍さだけでなく、彼らが社会の中で見えにくい位置に置かれやすい現実とも関わっているのだと思います。だからこそ、「障がいのある人たちが“ここにいる”ことを前提に作られた場」である愛徳パン工房を訪れたとき、「中国にも、自分の役割を持ち、働きながら暮らしている人たちがいる」という実感が初めて自分の中に生まれました。支援というと、「かわいそうな人を助ける」「できないことを補う」というイメージを持ちがちです。けれども、このパン工房で私が感じたのは、「対等な人として出会うこと」「その人の得意や好きなことを通して関係をつくること」が何よりも大切なのだということでした。ピアノを弾く彼や接客をするフージョンさんの姿は、“誰かに守られるだけの存在”ではなく、“自分の役割を持ち、他の人に喜びや安心を届ける存在”でした。そして、その背後には、長い時間をかけて一人一人を支えてきたスタッフの方々や、支援を続けてきた人びとの存在があります。「普通のパン屋」として店を続けること、「障がい者支援の場」として訓練を続けること、その両方を両立するのは決して簡単ではないはずです。それでも、「社会とつながる道を閉ざさないでいたい」という思いが、この場の空気として伝わってきました。



## YWCA の旅として、この経験をどう持ち帰るか

「南京を考える旅」は、本来であれば日本の加害の歴史と向き合うプログラムが中心ですが、今回は同時に、「今ここを生きる人びと」の姿を見る機会も用意されていました。その一つが、愛徳パン工房の訪問でした。過去の暴力や差別の歴史を学ぶことと、今、社会の周縁に置かれがちな人たち―障がいのある人やマイノリティの人たち―の尊厳を守ることは、別々のテーマのようでも、深くつながっています。歴史を学ぶことは、「今、自分は誰の存在を見過ごしているのか」と問い直すことでもあると、今回改めて感じました。

愛徳パン工房で過ごした時間は、「中国にも、障がいのある人と共に生きる場を作ろうとしている人たちがいる」という希望を感じさせるものでした。同時に、「日本社会や、私が関わっているコミュニティではどうだろう」と自分に問いを返すきっかけにもなりました。YWCA の一員として、また一人の若者として、障がいのある人たちとどのように出会い、共に生きる社会をつくっていけるのかを、これからの生活や活動の中で考え続けたいと思います。



### グループ 3: 愛徳・好来屋(コミュニティ在宅高齢者サービスセンター)

T.S. (日本 YWCA ボランティア)

一般に 65 歳以上の高齢者が総人口に占める割合が 7%以上である場合は「高齢化社会」、14%以上である場合は「高齢社会」、そして 21%以上である場合は「超高齢社会」と呼んでいる。

中国の 65 歳以上の高齢者人口は、2022 年の時点で 2 億 978 万人に達し、総人口の 14.9% を占めており、すでに高齢社会に入っている。中国が高齢化社会から高齢社会に転換するのに要した年数はたった 21 年で、日本が 27 年かかったのに比べて急速に高齢化が進んでいる。中国の場合、高齢者の絶対数がとても多く、2023 年には 65 歳以上の人口は 2 億 1700 万人もいる。

今回、「南京を考える旅 2025」参加者は 2 日目に 3 つの班に分かれ様々な施設の見学をした。私は「愛徳・好来屋社区居家养老服务中心」(コミュニティ在宅ケアサービスセンター)を希望、15 名での見学となった。

この施設のある南京市鼓楼区には、高齢者の食事支援サービスが 168 か所ある。愛徳・好来屋社区居家养老服务中心は元々幼稚園だったそうだ。その後地域の事務室～自治会の集会所のようなものになり、地域の人々がお茶や書道、歌を楽しむ場所として使用されていた。6 年ほど前に改装をしてスタート、この地域の半径 2km くらいに暮らす人たちが通ってきている。1 階の受付で相談を受けることができ、高齢者であればだれでも利用できる。その他にシャワー室、マッサージ器が使える部屋、電子レンジが使える部屋があり、また車をレンタルすることもできる。心理室もあり、ここでは認知症のアセスメントが行われている。病院での受診が必要かどうかを判断するという。週に一度医師が派遣され、問診を行っている。

2 階では実際に利用している高齢者の間に入り、一緒にレクリエーションに参加した。参加者 2 名が「高齢者体験」にチャレンジ。目には曇ったゴーグル、耳には耳栓、足首・肘・手の甲に重りやサポーターを付け、「見にくい」「聞こえにくい」「足が重い」「手が思うように動かない」体験。今は元気に動けているが、いずれ誰もが訪れるであろう不自由さを体験した。

利用者と一緒にテーブルにつき、布と棒と紐と何やら乾燥させた葉らしきものが出てくると、みんながささっと手を動かし作り始めたのが「ヨモギ養生ハンマー (マッサージ棒)」。周りを見たり、教えてもらったり、笑い声の中で出来上がったものをみんなで褒め合った。漢方のハンマーで、中身は乾燥したヨモギ。「これを家に置くとヨモギのいい香りがするよ」と教えてもらった。肩をたたいたり、背中をたたいたりする物だそうだ。自宅に持って帰り、コチコチの肩を叩くのに活躍している。

最高齢 91 歳の張さんのダンスも楽しんだ。張さんが「小苹果（シャオピンググオ）！」と言うとアップテンポの曲が流れ、曲に合わせてダンスをしてくれた。同じ席の方が「小苹果、みんな知っているわよ」と手拍子をしながら教えてくれた。帰国して調べたところ、大ヒットした曲で、広場ダンスでも人気とのこと。それにしてもお元気な。

中国の高齢者介護は家庭頼みというのが現状である。96%の高齢者が在宅であり、3%がコミュニティ介護、1%が施設介護という割合になっていると言う。少子高齢化が進んでも在宅で暮らすには、このようなサービスがなければ難しい。「愛徳・好来屋社区居家养老服务中心」は活動の場が2階ということもあり、対象者が限られる。張さんが車椅子になっても笑顔でここに通うことができるよう、工夫がされていくといいなと思いつつ見学の時間が終わってしまった。



#### <参考>

中华人民共和国人力资源社会保障部人者新闻

日本貿易振興機構（JETRO）2023.11.3 中国における高齢者サービス市場の概要（シリーズ1）（中国・大連発）

中国学.com 高齢化に直面する中国 2025.01.17

愛徳基金会 HP

# 南京師範大学 張連紅教授による基調講演報告

Y.C. (日本 YWCA 総幹事)

## 1. 講演概要

本講演は、南京師範大学の張連紅教授を講師として迎え、「中国と世界史の中の南京」をテーマに行われました。講師は、南京という都市の歴史的背景とその世界史的意義、さらに日中戦争期の南京事件の記録とその後の癒し・和解への実践について、多角的な視点から語られました。



## 2. 中国と世界史の中の南京

### (1) 都市文明の起源としての南京

南京地域は、約 100～120 万年前にはすでに古人類の活動が見られ、旧石器時代の「南京原人」の発見は東アジア人類史上の重要な発見とされています。南京は歴史上 10 の王朝の都となった「十朝古都」であり、南北朝時代以降、中国南方における政治・文化の中心として発展してきました。また、日中交流の起点としての歴史も強調されました。唐代の高僧・鑑真は南京の大報恩寺で修行を積み、日本に律宗を伝えたほか、医薬や食文化（豆腐、醸造技術など）にも大きな影響を与えました。

### (2) 世界史における南京の位置づけ

六朝時代の南京（当時の建康）は人口 100 万を超え、古代ローマと並ぶ「世界古典文明の二大中心」と称されました。明代には人口が 70～120 万人に達し、明城壁は世界最大規模を誇りました。イエズス会士マテオ・リッチは「世界のどの都市にも劣らぬ壮麗さ」と記しています。さらに、鄭和の大航海もこの地を出発点としており、南京は中国文明と世界の接点であり続けました。近代においても、辛亥革命後の中華民国成立により、南京は民主共和の象徴的都市として世界史的意義を持つに至りました。

### 3. 中日戦争と南京事件

講師は、1937年当時の南京で起きた暴行・略奪・破壊の事実を、朝香宮・松井石根ら日本軍指揮官の関与記録を交えながら紹介しました。東京新報などの記録によれば、少なくとも2万人以上の女性が性的暴行の被害に遭い、甚大な人的被害と混乱が生じました。市内には20か所の難民収容所が設置されましたが、いずれも収容能力が限られており、多くの市民は自宅の方が安全だと考え避難をためらったといいます。そのような状況の中で、ミネー・ヴォートリン、ジョン・ラーベ、ジョージ・ベーツ、劉文彬らが難民保護と記録活動を通して抵抗した事例が紹介されました。



### 4. 歴史的トラウマと癒し

講師は、南京大虐殺の生存者への聞き取り調査を通して明らかになった精神的被害について、複数の事例を紹介しました。被害者の多くが PTSD や抑うつ症状などの長期的影響に苦しんでおり、その癒しには長い時間と支援が必要であることを強調しました。また、加害者側のトラウマにも言及し、塩谷保芳（24回の訪中と謝罪活動）、東史郎、本多立太郎などの具体的証言を紹介しました。講師は「加害者もまた、誰かの息子であり夫である普通の人間が、なぜそのような行為に至ったのかを問うことが必要」であり、この課題は日本だけでなく世界共通の問題であると述べました。

### 5. 歴史認識・癒し・未来への提言

#### (1) 生存者との関わりと癒しの実践

歴史の事実を次世代へ継承するためにも、生存者との関わりと癒しの実践を継続することが重要とされました。トラウマを抱えた人々の「癒し」は、聞くこと・語ること・聞き合うことを通じた関係的行為であり、講師は大学生との協働によるピアサポート・ワークショップを継続的に行っていることを紹介しました。

## (2) 戦争への反省と未来への提言

過去の戦争の事実は変えられませんが、その歴史を正しく認識し、反省することが不可欠であると強調されました。経験から学び、未来の平和を築くために真実の歴史を知り、相手の立場を理解し合うことが「レガシー（遺産）」として求められています。講師は「中日間、そして世界の平和のために共に行動すること」を呼びかけました。

## 6. 議論と質疑応答

質疑応答では、「反省」という言葉の意味と行動の具体化がテーマとなりました。ある参加者からは「加害国の国民として、反省をどのような行動で示せばよいのか」という問いが出され、講師は「反省とは、相手の国や人々を理解しようと努め、課題から目をそらさず共に理解し合うプロセスそのもの」と答えました。一方で、「反省」という言葉が抽象的で感情的すぎるという意見もあり、「知る義務がある」といった具体的な行動を示す表現の方が理解しやすいのではないかという提案も出されました。講師はこの指摘を受け、期間中に「反省」という言葉の意味を自ら深めていくことを参加者一人ひとりの“宿題”としました。

## 7. まとめ

本講演は、南京という都市の歴史的な多層性と、戦争の記憶をめぐる癒し・共感・学びの実践を通して、平和構築への道を考える貴重な機会となりました。「知ること」「語り合うこと」「共に生きること」の大切さを、改めて深く問い直す内容でした。





### 侵华日本軍南京大屠殺遇難同胞記念館を訪れて

Y.K. (日本YWCA ボランティア)

3日目の朝、侵华日本軍南京大屠殺遇難同胞記念館に向かいました。門をくぐると、広場にごつごつとした壁塔が聳え立っていて、塔には1937.12.3-1938.1、壁には300000と刻まれていました。私たちは鐘をついて黙祷したあと、展示室に向かいました。

展示室に入ると、本棚にびっしりと本が並んでいました。南京大屠殺で被害を受けた人々についての本です。青いラベルは生存者、黒いラベルの本は亡くなった方について記されているといいます。

階段を降りると、満天の星空、そして壁一面に犠牲者の写真がありました。白黒写真はBC級戦犯の調査で発見された犠牲者で、カラー写真は生存者。中央には「遇難者・遭難者300000」と刻まれた碑がありました。現在、名前が分かっている犠牲者は1万3千人。日本軍によって散り散りにされた資料と思い出すこと自体が傷を深めるような記憶を頼りに犠牲者の人生を記録していった方々に敬意を表しつつ、犠牲者の9割は名前すらわかっていない事実にも胸を痛めました。この記念館は、「遇難同胞」記念館であり、犠牲者を追悼し記憶する決心を込めて、黙祷をしました。

日本軍が歪めた城門を進むと、序文には「過去を忘れず、平和を心から愛し、未来を切り開いていこう」とありました。展示は、大きく4つの章で構成されていました。

1つ目は日本が行った侵略について。日本軍は陸路から侵略を始めました。1931年9月18日九一八事変を意図的に起こし、局部的な対中侵略戦争を発動、のちの全面的な侵略戦争を続けました。特に侵略経路を表した映像は南、東、北三方向から包囲したことがよくわかりました。その経路で、日本軍による放火、殺人、強姦、略奪で傷つけられた人々を思うと今も背筋が凍ります。

上海を占拠した日本軍は、空襲を始めました。1937年8月15日から4ヶ月間、九州から爆撃を続けて、多くの民間人を犠牲にしました。世界で初めて南京を伝えた、娘の死体を抱えて歩く母の写真、身元が判明している市民の写真と共に、その人生と被害の一部も記されていました。

空襲を受けた街の再現を進むと、日本の南京侵攻についての展示が続きます。日本軍華中方面軍の組織について解説、そして多くの難民と、日本軍による強制収容の写真です。特に印象的な事件は、南京陥落を祝う入城式の前日に起こりました。偉い人が来るからと、治安維持の名目で市民捕虜を急いで虐殺したというのです。これが、南京大屠殺の、初期の重要な原因だということです。

第二章は、南京陥落後の日本軍の暴行についての展示でした。資料と多数の写真が展示されていて、その圧倒的な量の証拠を見れば、虐殺を否定するには難しいでしょう。中央には実際の被害者の遺体が展示されていました。万人坑という、多数虐殺した市民と兵士の埋葬地で見つかった遺体です。

南京での暴力は大きく4つに分類できます。

①大虐殺:多数の市民を収容し徹底的に殺しました。捕虜虐殺です。当時多数の捕虜を捕らえたと伝えた新聞が、捕虜の行方は報道しませんでした。また、警察官を集めて殺し、死体を燃やして証拠隠滅を図りました。埋葬の記録からもその残虐さを伺えます。軍は冬は遺体を放置しても「大丈夫」としていました。埋葬隊員の証言によれば「一般市民の方が多く、20万人以上が埋葬されました。さらには、百人斬りといい2人の兵士がどちらが先に百人殺すかで賭けをした報道紙面がありました。結局勝敗はつかず、2人はまたそのあとも百人斬りを続けました。人の命を、人生を遊びのように殺していくなんて、恐ろしく愚かな、究極の差別だと思います。

②性暴行:慰安所への強制連行だけでなく、街で一般市民に暴行も後を立ちませんでした。当時12歳の少女や妊婦もあり、激しく抵抗した妊婦の李秀英さんは、19回も刺され死亡しました。極東国際軍事裁判によれば、南京占拠後の最初の1ヶ月だけで、城内で2万件近い強姦を行いました。胸が痛む写真の数々が展示されていました。この事実を否定して謝罪も補償もしない日本社会の女性蔑視と家父長制の根強さに憤りを感じつつ、絶対に繰り返してはいけないと改めて思いました。

③強奪:88万冊の資料が奪われました。損害は、戦後責任追及の大きなテーマの一つです。

④放火と破壊。ガイドの方がこれらの全面的な暴力は、単に数字の問題ではないと解説してくださいました。

第3章は人道主義的救済について。主に外国人、宣教師が救済にあたりました。ジョン・ラーベは自らのナチスという身分を利用して安全区を作った管理者でした。南京師範大学ヴォートリンは、女性と子供しかない(=軍人はいない=日本人が入る理由がない)難民キャンプを作り、2万人を守りました。しかし彼女は鬱病を煩い、やむを得ず帰国。南京大虐殺は、ついに彼女を自殺させてしまいました。

第4章は報道について。特に米国ではよく報道され、ニューヨークタイムズは「全ての捕虜が殺されて、市民も殺された」と知らせました。報道を恐れた日本は南京市内から外国人を追い出しました。中国人と和解したかのような写真を使い、侵攻により平和が訪れたと虚偽宣伝を流しました。日本軍の暴行の報道と写真には「不許可」の判が押されましたが、虐殺された捕虜なのか、戦闘による死なのか、把握ができないという理由でした。こうして捕虜虐殺を隠蔽してきたのです。

記念館は、犠牲者数について明確に示しています。東京裁判の判決文では20万人以上、

南京裁判では 30 万人以上でした。この 2 つの数字は矛盾ではないとしています。日本政府が調印したサンフランシスコ条約の第 11 条が理由です。日本政府は現在もこの見解を否定しています。私は、言葉遊びのように感じます。それに、人数の問題ではないと思います。一人として殺されていい人間はいません。それに、20 万人ですら多すぎる被害者数です。謝罪と責任追及をしない理由になりません。

最後の展示室は、近年の歴史継承の活動についてでした。記念館で展示をするのは、現在と未来のため。習近平は追悼式で「我々が南京大虐殺犠牲者のために国家追悼式を挙げるのは、善良な人々一人一人の平和に対する志向と堅守を喚起するためであり、恨みを継続するためではない」とスピーチをしました。この言葉を聞いたときに、少し安心してしまっている自分に気づきました。「恨みを継続するためではない」という言葉は、とても耳障りがいいけれど、日本人の私から求めてはいけないと思いました。反省も謝罪もなく許しを求めることは、それもまた暴力ではないでしょうか。

展示室を後にして、追悼式を執り行い、花を捧げたあと、野外展示へ向かいました。万人坑の横を通り、暗い展示室から一変して、穏やかに流れるせせらぎと、悲しみや痛みを表現した彫刻、天に突き刺さる「和平」の文字が刻まれた塔。記念館を取り囲むように、緑が植えられていました。その植物は紫金草。山口誠太郎医学博士が、南京で見た悲惨な光景への懺悔と平和への祈りを込めて、日本に種を持ち帰り、人々に配ったのだといいます。種を拾った紫金山にちなんで名付けられたその花は、その後ご子息や多くの人の手によって日本各地に蒔かれ、ついに故郷の南京にも芽吹きました。3 月になると、紫の花弁が満開になるそうです。

侵华日本軍南京大屠殺遇難同胞記念館を訪問して最も勉強になったことは、日本で見たことがなかった写真と資料をたくさん見ることができたことです。日本軍と企業が殺めたのは、数字ではなく、人生であり、語りであるということを体感しました。特に日本軍の性暴力の写真は、衝撃を受けました。傷ついた女性たちの話を聞いたり、女性として生きていると、写真の中の出来事が遠い昔のこととは思えません。この「衝撃」を、私の言葉で語っていくことが、旅に参加した責任だと感じています。



## 沈黙の中で響く声：南京利濟巷慰安所旧跡陳列館を訪ねて

C.Y. (日本YWCA ボランティア)

23日の午後、私たちは南京利濟巷慰安所旧跡陳列館を訪れました。ここは、中国に現存する最大規模の慰安所建物群であり、強制的に連行された多くの「慰安婦」被害者が閉じ込められていた場所として知られています。陳列館はもともと、南京に在住していた国民政府の将軍が築いた八棟の建物群でしたが、1937年に日本軍が南京を占領した後、慰安所として改造されました。ガイドの方によると、その中でも最も大きなI字型の建物が、主に朝鮮半島から連れてこられた女性たちが収容されていた場所だそうです。この場所の歴史的な意味は、朝鮮人被害者である朴永心（パク・ヨンシム）さんの証言によってより鮮明になりました。朴さんは生前に南京を訪れ、ご自身が監禁されていた建物を特定されました。陳列館の外壁にある三人の女性をかたどった大きな彫刻のうち、左側の妊娠中の女性像は、朴永心さんが中国・雲南省で解放された際に米軍によって撮影された写真をもとに制作されたそうです。



展示室に足を踏み入ると、まず天井に設置されたモニュメントが目に入りました。「言葉の出せない涙」をテーマにしたこのモニュメントは、鉄条網に囚われた女性たちの絶望を象徴しています。展示は「第二次世界大戦中の性奴隷制」というテーマから始まり、慰安所制度の起源や形成過程が詳しく紹介されていました。1918年のシベリア出兵時に「からゆきさん」と呼ばれていた日本人女性の移動を制度の「前史」として位置づける日本の研究者の見解を紹介しながら、制度の本格的な組織化は1932年の第一次上海事変以降、特に岡村寧次ら日本軍上層部の関与によって進められたことが示されています。南京では陥落直後の1938年1月1日に大規模な慰安所が設けられたことが、日本軍の従軍日誌などの記録から確認されているそうです。慰安所の運営形態には軍直営や指定など様々な種類がありましたが、すべてが軍の管理下に置かれていました。料金規定や利用上の注意が記された当時の資

料などからも、軍が制度を統制していたことが裏付けられます。

展示では、中国が「慰安所制度の被害人数が最も多い国」であるという研究結果が紹介されていましたが、一方で南京市内の慰安所に関しては朴永心さん以外に中国人被害者による直接的な証言がほとんど存在しないことも示されていました。この事実が、被害者たちが抱える「語りづらさ」の重さを物語っているように感じました。展示は南京だけでなく、山西省や海南省など各地の中国人被害者の証言、さらには東南アジアやオランダ人の被害者、沖縄戦の際に朝鮮半島から連れて行かれた裴奉奇（ペ・ポンギ）さんの事例など、広範囲にわたる被害の実態を伝えていました。特に広西省の韋紹蘭さんのように、日本兵との間に生まれた子どもとともに村の人々から排除され、生涯にわたり苦しみを背負わざるを得なかった事例や、戦後も本国へ戻ることができず中国に残留した朝鮮半島出身の女性たちの問題などを通して、戦争が終わっても解決されていない被害者たちの「その後」の人生の苦難に焦点を当てていました。

展示の終盤には、涙を流すおばあさんの彫刻が「彼女のために布巾を使って涙を拭いてください」というメッセージとともに設置されていました。私たちも一人ずつその前に立ち、布巾でそっと涙を拭きました。その瞬間、被害者一人ひとりの痛みを自分の中に受け止め、記憶し続けることの大切さを静かに訴えかけられているように感じました。

隣の建物の2階には、朴永心さんが実際に収容されていた「19号室」の部屋が復元されていました。3年間という長い時間、この小さな空間で性奴隷としての生活を強いられていたという事実を、部屋の空気がそのまま伝えているようでした。また、協力を拒んだ女性を監禁するために使われたという「監禁室」も再現されており、この場所がいかにか非人道的な環境であったかを実感しました。部屋の中には天井へと続くはしごが設置されており、説明によると、命令に従わない女性はその上に上らせられ、協力するまで下りられないようにされたといいます。時間の都合で全ての展示館を見ることはできませんでしたが、短い滞在でも深い印象が心に残りました。



展示館では、日本政府による公式な責任認定が未だ進んでいない現状がある一方で、国際社会や研究者、そして被害者自身が長年にわたり真相究明と責任追及を続けてきたことが強調されていました。「1945年8月15日、慰安婦制度は消滅したが、この制度が多くの女性に与えた心の傷跡は今も残っている」という展示館の結びの言葉が、静かな空気の中で胸に深く響きました。展示館を出た後も、実際の慰安所があった場所という空間の重みや、涙を流す彫刻の表情が頭から離れませんでした。この歴史の記憶を、どのように次の世代へ伝えていくのかを改めて考えさせられる時間となりました。



## 国際安全区資料館

Y.T. (日本 YWCA ボランティア)

ジョン・ラーベ (John Rabe、中国名：约翰·拉贝、1882～1950) は、約 30 年間中国に暮らしたドイツ人商社員で、1937 年の「南京事件」の発生時には、シーメンス社の中国支社の責任者として南京に在住していました。「南京事件」に関連して、彼は二つの大きな歴史的貢献をしました。一つは、日本軍の南京侵攻の際に、南京に残っていた十数名の外国人と共同で「南京安全区国際委員会」を組織し、その委員長として中国の民間人（難民）の保護に努めたことです。彼らの尽力によって、約 25 万人の中国人の命が救われたといわれています。もう一つは、そうした状況下であって、日々の詳細な日記をつけていたことです。半世紀以上のちに『ラーベの日記』として世に知られるようになった彼の日記は、戦争下の当時の状況をよく記録した、とても貴重な資料（史料）になりました。

ラーベが南京でかつて暮らしていた住居は、今は南京大学の「国際安全区資料館」として整備されており、開館以来 30 万人以上の見学者が訪れています。私たちは 9 月 23 日の午後に訪れましたが、車のクラクションがひっきりなしに鳴り響く南京の都会の喧騒の中でも、この一角には不思議と穏やかな時間が流れていました。その日の午前中、南京大虐殺記念館を訪れ、とても重たい気持ちになっていた私にとって、少しでも深呼吸のできる空間でした。

敷地内の庭には、(当時のものではなく再現とのことですが) いくつかの防空壕が掘られていました。日本軍の空爆が南京市街を襲った時、ラーベはこうした防空壕に人々を匿いました。ドイツ人の彼はナチスの熱心な党员でもあったので、防空壕をハーケンクロイツ (鉤十字) の描かれたナチスの旗で覆うことで、ここは同盟国のドイツのエリアだと日本軍に示し、安全を確保しようとした。もちろん、ナチスがその後行った非人道的な蛮行を私たちは知っているわけですが、ナチスを前面に持ち出すことによって日本軍を退け、結果として多くの人命が救われたという構図に、形容しがたい複雑な思いも同時に感じました。

ラーベの旧宅は 1930 年代に建てられた立派な洋館で、建物一階にはラーベのライフストーリーが、豊富な写真や遺品などをもとにパネル展示されています。残念ながら日本語の説明文はありませんが、中国語だけでなく、ほとんどの展示に英語でも説明が記されていました。

1882 年 11 月 23 日、ドイツのハンブルクで生まれたラーベですが、家庭はあまり裕福ではなく、中学の頃から仕事を始めていました。アフリカでしばらく働いたのち、1908 年から中国 (はじめは北京) で暮らし始め、翌年には妻ドーラと結婚します。仕事が優秀だったため、シーメンスの中国支社に勤めるようになり、中国各地を渡り歩きます。南京で暮らすようになってからも、忙しいながらも充実した仕事ぶりの生活を送っていました。

そうした穏やかな生活も、1937 年の戦争勃発によって急変します。8 月 15 日には、日本

軍による初めての南京空襲が起きました。その時ラーベは妻のドーラと二人で、北の方の別荘地で休暇を楽しんでいたところでしたが、空襲のニュースを耳にして、慌てて南京に帰ってきます。もちろん、危険な南京から避難するという選択肢もあったわけですが、ラーベは南京に留まることを決意します。最も大きな理由としては、彼はすでに30年近く中国で暮らしていたため、周りの中国人たちと深い友情関係を結んでいたことがあります。人生の最も良い時期を南京で過ごし、そして子どもたちも中国で生まれたので、そうやすやすと中国を見捨てることができず、この土地を守りたいという思いにさせたのでした。

1937年11月、ラーベをはじめ、南京に残った外国人たちが集まって会議をした部屋が残されています。彼らはその場所で、難民を收容することを決断しました。外国人の有志たちによって「南京安全区国際委員会」が結成され、その数日後にはラーベが委員長として就任しました。南京のうち、約3.86平方キロメートルの範囲を安全地域とすることに決めましたが、その中には大学や多くの小・中学校が含まれています。ラーベの住居であった建物も、難民收容所の一つとなりました。この場所には約600人の難民を收容しましたが、ラーベの尽力の結果、その一人の命も失われませんでした。中国人の命が守られただけでなく、南京には未だに文化的な建物が多く残っていますが、それもラーベたちの力で保護された結果です。

ただ、こうした努力もむなしく、翌1938年にはラーベはドイツに帰国せざるを得なくなりました。ドイツに戻った後も、南京でどういう事件が起こったのか、写真やビデオをもとに人々に伝えるようになりました。ヒトラーに手紙を書いて、日本軍の非人道的な行為をやめさせるように進言したこともあります。けれども、そうした願いはドイツ政府に無視されるどころか、ゲシュタポに逮捕されてしまいます。自社の社員として多大な貢献をしてくれたことを理由に、シーメンス社がラーベの釈放を願い出たものの、釈放するときの条件として、今後一切南京のことを伝えないようにと口止めをされました。ラーベは釈放されてから、経済的にも困窮しましたが、南京市民との交流は途絶えることがありませんでした。そして1950年1月5日、脳卒中により帰天しました。

今回の旅に訪れる前に、2009年に独・仏・中の合作で制作された映画『ジョン・ラーベ ～南京のシンドラ～』を鑑賞してきたことも、(映画には史実と異なる創作要素も盛り込まれているものの)ラーベに対する理解を深める上で大いに役立ちました。余談ですが、南京のホテルでは、映画を観られるチャンネルがあり、そこでオンデマンド配信されている作品の中には、この映画のほかにも『南京！南京！』や、南京事件についてのドキュメンタリー、生存者のインタビュー集といった映像も充実していました。

「南京事件」を経験したラーベは、膨大な量の日記を書き残しましたが、1938年の帰国後、それはまったく日の目を見ることはありませんでした。それから60年近く経ち、ひょんなことから日記の存在が明らかになり、1996年に『ラーベの日記』として出版されるに

至りました。すぐに様々な言語に翻訳され、一躍世界中の人に知られるようになりました。

日記の歴史的な価値に加えて、この日記が貢献したある出来事があります。当時8歳だった夏淑琴（シア・シュウチン）さんは、9人家族のうち、妹と自身以外の家族を日本軍に虐殺された体験を証言された幸在者の方です。家族を凄惨に殺され、自身も大きな傷害を負わされた夏さんに対して、日本の右翼作家らが「偽物、嘘つき」呼ばわりしたため、それに対して南京で1回、東京で2回、名誉毀損の訴訟を起こしました。裁判の結果、賠償金を勝ち得たのは、『ラーベの日記』に記載があったおかげでした。

「南京事件」という未曾有の人道危機のなか、当地にいた外国人として、自身の良心と使命に忠実にあろうとしたラーベの姿は、それぞれ時代も場所も異なりますが、他の勇敢な「外国人」のことを思い起こさせました。たとえば1940年、リトアニアの領事館で大量の（主にユダヤ系の）難民に「命のビザ」を発給して命を救った杉原千畝、1945年、原爆投下後の広島にて、自身も被爆しながら多くの被爆者の救援活動にあたったペドロ・アルペ神父、そして1980年に韓国で起きた光州事件の様子を命がけで記録・報道したドイツ人記者ユルゲン・ヒンツペーター。そうした人々の「英雄的」な人道行為に通底する想いとは一体何だったのかと、深く考えさせられる機会になりました。



## グループ別シェア I :今を生きる日中の若者が平和を語り合いました

S.R. (名古屋 YWCA 会員)

日中のメンバー40人が混ざり、4つのグループに分かれました。グループでの初顔合わせは初日の歓迎夕食でした。歓迎夕食ですでに自己紹介をしていたので、「グループ別シェア I」ではスムーズに話すことができました。つまり2回目にグループで集まったのが、「グループ別シェア I」となります。

写真をご覧ください。みんなグレーのポロシャツを着ていますね。南京大虐殺の犠牲者を追悼する記念館を訪問した後だからです。私はグループ4です。

「記念館を訪問した感想」「平和のために何ができるか？」について一人ずつ出し合いました。日中が混ざり、一人ひとりの感想を真剣に聞いていました。お互いに感想を伝え合うことに、私はとても感動しました。参加者それぞれの「心の震え」を感じることができたという方もいました。個人旅行では体験できないことです。言葉の壁がありディスカッションとはなりませんでした。とても貴重な時間を過ごしていると感じました。加害の国の若者、被害の国の若者が、同じテーブルにつきじっくりと互いの声を聴きました。平和のために何ができるか、自分の意見を出し合いました。このような光景を、1937年にこの地にいた人たちは想像もできなかったでしょう。

日中で同じテーブルにつき平和を求めようとする体験は、私にとって貴重な体験でした。私の人生で最初で最後かもしれません。発表することで、自分の意見の本質が現れます。それを聞き合いお互いの刺激となり、ステージでのピースアクションの発表につながったと思います。





### グループ別シェアⅡ

T.Y. (日本 YWCA 職員)

4日目の午前中に行われたグループ別シェアⅡでは、3日間での出会いや、体験を通して得た「気づき」や「学び」を共有し、「これから私たちがどう行動していくか」をテーマに対話を深め、グループごとに旅の成果物としてのアクションプランを発表するための準備の時間として設けられました。

#### 1. グループシェアのプロセスと対話

シニアからユースまで多世代で成された各グループごとに、まず参加者たちはフィールドワークや交流を通して得た学びや、心に響いた瞬間を率直に共有しました。個人的に特に印象的だったのは、南京 YWCA の職員からの共有です。彼女は、自身が南京に生まれ育ったが、記念館を訪れるのは初めてであったこと。これまで足が向かなかったが、今回勇気を出してこの旅に参加したことを分かち合ってくれました。歴史の痛みや辛さを前に自分たちがどう受け止めたのか、また今後どう受け止め伝えていけるのかという点についても、時間いっぱい話し合いました。その後、対話を通じて共通点を探り、集合知として可視化しました。アクションプラン作成の過程では、模造紙に折り紙やカラフルなペンを使い、地図や木を描くなど、各グループが短い時間のなかで協力しながら、自由に創造的な表現方法を用いていたことも印象的です。

#### 2. グループディスカッションの焦点：持続可能な平和への行動

ディスカッションの焦点は、旅の学びや感動を一過性のものにせず、いかに継続的な行動へと結びつけ、平和を確かなものにしていけるか、という点に置かれました。そのなかでグループ2では、「平和の種を蒔く」というテーマを設定しました。一人ひとりが取り組むアクションをハートの台紙に書いて、「これから私たちがどんな種を蒔けるのか、そして希望という花を咲かせるためにはどんな栄養が必要か？」という視点で、真っ白な模造紙を手にとり。

まず平和の「種」として、平和教育、分かち合い伝えること、愛、平和に対話すること、行動することの5つを掲げました。これらの種を育む「土」の中には、参加者一人ひとりが旅で感じた想いが込められています。そして、成長に必要な「水や太陽の光」として、仲間とともにグローバルに行動することや、手を携えて平和をつくることを表現しました。

### 3. 閉会式での全体発表

グループシェアで作成されたアクションプランは、旅の締めくくりとなる閉会式にて全体発表されました。旅で得た出会いと繋がりを力に、一步一步の歩みは小さくとも、それぞれの持ち場において連帯していくことを宣言しました。各グループの表現やアプローチ方法は少しずつ異なりましたが、その根底には「微力でも無力ではない」という想いが共通して流れていたように思えました。



## 閉会式・平和行動計画

Y.A. (日本 YWCA 書記)

「南京を考える旅」の最後のプログラムである閉会式は、開会式と同じく芸術金陵音楽堂で行われた。中国 YWCA のボランティアで、上海で「自然の声」という親子合唱団を創設・指導している俞璟安さんと私が司会を務めた。

最初に 4 つのグループからの「平和行動計画」の発表が行われた。講演やフィールドワークで得た学びを基に、平和を具体化するために一人一人がどのように行動したらよいかを考え、グループでまとめたものだ。グループ 4 は平和の木のイラストにメンバーそれぞれが選んだ「教育」、「対話」、「一歩ふみ出す」などのキーワードを書き込み、そのワードについて自分がしていきたいことを発表した。あるメンバーは戦後 80 年が経ち、戦争の悲劇を直接体験された世代が次第に世を去っていく中、その経験に耳を傾け、受け止めることが自分たちの世代の責任であるとして、平和を妨げる差別や暴力に対して声を上げていきたいと語った。

次のグループ 1 も同じく木のイメージを用いて、根の部分に当たるそれぞれが考える平和と、それを実現するための具体的アクションについて発表した。日本のメンバーからは、平和とは「一人ひとりの尊厳・人権が守られて尊重される」ことであり、そのために「身の周りの構造的暴力や差別を認識し、指摘する、話題にする」アクションを起こしていくという決意が語られた。

グループ 3 のテーマは「ポストカード」。これは以前もこの旅に参加し、参加者と友情を深め、帰国してからも葉書のやり取りをしているというメンバーのエピソードにちなんだもので、模造紙に中国と日本の参加者それぞれの拠点を示し、南京から戻って実行したいことを綴った。ユースメンバーの一人は「過ちを認める・自分を顧みる・分析する・声を聴く・声を上げる・また中国に行く」と語っていた。葉書ではないが、今もグループ 3 の WeChat グループでは中秋節のメッセージなどが交わされている。

グループ 2 のイラストは地中に埋まったそれぞれのメンバーの平和の目標や思いである「種」が、芽を出し、愛と希望に満ちた花を咲かせる様子を描いたものだった。種の一つには「平和教育」があり、平和教育を通して子どもたちに世界を愛し、戦争のない世界を願うようになってもらうために、例えばサマーキャンプで反暴力・反差別を多くの子どもたちに伝えることができるだろうというアイデアを共有してくれた。過去の旅では前日の夜からグループで意見交換し、プレゼンテーションの準備をしていたが、今回は当日の午前中のごく短い時間内に仕上げなければならなかった。それでも、どのグループも工夫を凝らした発表であった。

次に、今回の旅の新たな試みである「共に平和の美しい絵を描く」日中 YWCA ユース平

和アート展の応募作の中から5点の優秀作品と4点の奨励作品の発表があった。画家の東進生さんが1点1点について丁寧にコメントされたが、絵の技術の優劣よりも平和を愛する気持ちを重視されていたのが興味深かった。その後で日中の総幹事からの総括講演があり、日本YWCA総幹事の山本知恵さんは、7年ぶりの南京を考える旅が無事に閉会式を行われたことを中国YWCA、関係者、また参加者一人一人に感謝し、最後に平和をつくることの難しさに触れ、あらゆる暴力を否定して、平和な世界を実現しようと呼び掛けた。この旅を通して、中国YWCA総幹事の归晓欣さんは「日本は中国の隣人」という言葉を何度も口にした。現実の隣人とは境界線や騒音、庭の草木などをめぐってトラブルになることがあるが、国同士の場合は引っ越すわけにもいかない。過去の歴史を乗り越えて中国の善き隣人となれるよう、南京を考える旅のような草の根の交流をこれからも続けていければと願いながら両総幹事のお話を聴いた。

通訳の方々など関係者への謝辞や、中国YWCA100周年記念のプレートの披露を経て、いよいよ「共に青春の華やかな章を歌う」ショータイム！あいにくの土砂降りでは本来ならば屋外へ移動するはずだったが、そのまま音楽堂で行われた。中国側の司会の俞璟安さんは前日リハーサルでの歌唱指導、当日もBGM代替りのピアノ演奏、本番の指揮とマルチな活躍ぶりで、バンドの演奏をバックに、日本・中国からそれぞれ5名のメンバーがステージで中国でも知られているJ-POPのナンバーや、日中文化交流に尽した谷村新司の『昴』を日本語と中国語とで、またプロの声楽家のリードで『Amazing Grace』などを歌った。俞さんが書いたと思われるオリジナル曲もあった。客席の参加者たちもスマホのライトをかざして一緒に楽しんでいた。合唱をやっていると、よく「声を合わせて、心を合わせて」と言われるが、音楽には人の心をつなぐ力があると思う。旅の最後に皆が音楽を通じて、平和を願い、心を一つにできた閉会式だった。

旅の実施にご尽力くださった全ての人々に心から感謝を申し上げる。



---

## 南京を考える旅を終えて: 日本 YWCA の役割とは

---

F.S. (日本 YWCA 代表理事)

プログラム当日まで、直接顔を合わせることなく、現地集合で始まる南京を考える旅。中国側にどんな参加者なのかを懸念する以前に、同じ日本側の参加者同士も、個人個人の社会的背景も職業も、年齢も性別も異なる多様性あるメンバーです。参加者に、共通しているのは「ここ、南京でおこった真実を知りたい」という強い責任感。そして、「事実を知る」ということで、自分自身がどう変容していくのか、その過程をチームで共有し、共感しあうことによって、未来にむけての自分がなすべきことを見いだしたいという熱い思いです。

参加者は、3日間という短い時間ではあるが、聞く・見る・話し合う・感じると、五感をフルに使う濃縮したプログラムに頭から飛び込みます。全ての参加者が全身で吸収し、悲惨な歴史事実を知ること、怒り、そして涙し、未来にむけて何ができるかという計画に目がかがやかせて笑顔で語りあう姿は、今も私の心に得難い瞬間に立ち会えた喜びとして残ります。

この旅を通して、加害・被害といった立場を越えて、赦し・贖うという感情の波に飲み込まれそうになりながらも、互いにその波を越えて、同じ人間同士として平和な社会を維持していくために、それぞれの立場が異なっても、繋がっていくことが可能であり、またその繋がりが必要であることを、強く感じたのではないのでしょうか。

平和な社会の継続のために、平和の種を撒き続けることは、YWCA の使命です。この旅の参加者がこれからそれぞれの地でどのような花をさかせるのか楽しみにしつつ、私達、日本 YWCA は、これからも平和の種を撒き続けてまいります。

最後に、この貴重な旅を、抗日戦争勝利 80 周年記念行事で、国内情勢の予測がつかない困難な状況にありながら、たゆまず旅の実現にむけて尽力いただいた、中国 YWCA 及び YMCA の皆様に、改めて感謝申し上げます。





S.R.

旅の前に、旧日本軍がしたことを学びました。残虐な加害を目の当たりにして、日本人の私は中国の方とどう接すればいいのか思いめぐねていました。そんな時、映画『731』の公開が柳条湖事件の日でさらに旅の3日前というニュースが飛び込んできました。私たちが標的になるかもと不安になりました。このような感覚は初めてでした。歴史と自分がつながったような感覚でした。私たちが攻撃したい人がいるなら、私は謝りたいという気持ちになりました。謝りたくても謝れずに亡くなった先祖と共に、セレモニーで菊を供えて心の中で謝りました。加害の写真を思い出し、心が強く揺さぶられ涙が出ました。

グループ別シェアで中国のメンバーは私のこの思いを静かに聞いてくれました。「謝意を胸にこの中国に来てくれたことに感動している」と言ってくれた方がいて救われた気持ちになりました。帰国してよく考えたことは「平和な人間関係をつくるには？」です。私には、「私の考えは正しい」「私を大切にしてくれよ」と上目線で人と接してしまうことがあることに気づきました。旅での自分の行動を振り返って気づきました。これでは平和な関係を築くことができません。この上目線な私を変えることが、私の最初のピースアクションです。

T.S.

「侵華日軍南京大屠殺遇難同胞記念館に行きたい」そんな思いがずっと心の底にありました。様々な社会問題にぶつかったり学んだりする中で、いつか行かなくてはいけないと思う場所の一つでした。東アジアの近現代の歴史認識が変えられようとしている/変えられてきている今、「個人である自分」としてできることがあるのかということを中心に考える機会になるであろうという気持ちで参加しました。

2日目の夜、南京師範大学副学長であり、南京師範大学南京大屠殺研修センターの主任でもある張連紅教授の講義がありました。南京の歴史から始まり、日本軍がどのようなルートで南京を侵略してきたか、多くの証言や資料からの事実を語ってくださいました。

3日目、侵華日軍南京大屠殺遇難同胞記念館を見学、ていねいな説明を聞きながらの見学でしたが、その残虐さと目から入る情報の多さに圧倒されました。今まで「知っている」と思っていたことが現実として今の自分に迫ってきました。胸が重い、息苦しくなるような体験、「前事不忘 後事之師」という言葉がずっしりと残りました。この言葉は今も重く残っています。

張連紅教授がおっしゃるように、中国と日本が平和関係を作り上げるには、この南京で実際に行われた事実をなかったことにしたり、捻じ曲げたりすることなく、歴史の認識を共有することからしか始まらないのではないかと、そう思いました。ともに学んだ若い仲間の「平和を作るには、日常から戦争の『種』をひとつひとつ潰していくことが必要」という言葉が印象に残っています。身近なところで『種』を潰していくこと、歴史の認識が誤った方向に行かないように抵抗していくこと、

これがまず「個人である自分」にできることなのだと思います。今もずっしりと残る「前事不忘 后事之師」を日常に埋もれさせることなく。

この旅を準備してくださり、進行してくださった中国 YWCA、日本 YWCA のスタッフ・ボランティアの皆さんに心から感謝いたします。何ものにも代え難い経験をさせていただきました。プログラムの内容も素晴らしく、心配りもあらゆる場がありました。ディスカッションの時にも「安心して話していい場」を作ってくださいました。これからの世代を担うユースのメンバーにもたくさんの希望をもらいました。ありがとうございました。

---

C.Y.

この度は「南京を考える旅」に参加させていただき、誠にありがとうございました。日本と中国の歴史を考える今回のプログラムに、韓国人である私が参加しても大丈夫かと少し迷いましたが、両国の皆様に暖かく受け入れていただき、一生忘れられない時間を共に過ごすことができました。心から感謝いたします。

私は大学生の頃から、日本軍「慰安婦」問題に関わる活動を続けてきました。日本に留学してからは、日本社会の視点からこの歴史を改めて学ぶ機会を得ましたが、今回の旅で中国の視点が増えたことで、この問題をより重層的かつ包括的に理解できるようになったと感じています。特に、以前から訪問を願っていた「南京利濟巷慰安所旧跡陳列館」を訪れることができたのは、今後の活動においても大きな原点となる経験でした。日本や韓国にある関連施設と違い、南京の陳列館は実際に慰安所があった場所に建てられており、その空間が持つ重みを肌で感じることができました。また、南京の慰安所に連行された朝鮮人被害者・朴永心さんの人生と勇敢な証言を通じて、日本の植民地支配に起因する朝鮮半島の分断と平和についても深く考えさせられました。

さらに、中国 YWCA の皆様のご配慮により、「侵華日軍南京大虐殺遇難同胞記念館」にも訪問することができました。展示や証言を通じて、教科書で学んだときよりもはるかに具体的に、個々の人々の姿を通して歴史を認識することができました。私は普段、歴史を記憶し次世代に伝えようと努力されている方々を記録するドキュメンタリー映画を制作していますが、一昨年には関東大震災時の朝鮮人虐殺をテーマに作品を作りました。その時の経験を思い出しながら、現代にも続く差別と暴力、そして加害の構造について改めて考えました。また、女性の場合は性暴力など二重三重の苦痛を受けたという事実にも胸が痛みました。当時の経験を証言された被害者たちの勇気を記憶し続け、同じ悲劇を二度と繰り返さないことが私たち世代の重大な責任だと感じました。

また「ラーベ旧居」では、一人の人間の勇気ある行動が数多くの命を救うことができるということ学びました。巨大な暴力の前では個人の力が限られているように思える時もありますが、ラーベの行動のような平和を守る実践を共に学び、私たち一人ひとりがどのような行動を起こせるかを考えていくことが重要だと感じました。この学びを胸に、最近パレスチナで起きているジェノサイドに対しても、今いる場所からできる行動を続けていこうと決意しました。

一方で、グループ活動として訪問した「愛徳パン工房」では、社会貢献活動の新しい形を学ぶ機会もいただきました。このパン工房では、障がいを持つスタッフの方々が直接パンを作り、地域の

人々と持続的に交流を続けているとのことでした。印象的だったのは、社会的マイノリティを一方的に「支援する」という考え方ではなく、誰もが社会の平等な一員として働き、他者と関わり合う仕組みが確立されていたことです。そのような取り組みが、この街とコミュニティの平和に確かに貢献していることを実感しました。

今回の旅で得た最も大きな宝物は、多様な立場で活動されている皆様との出会いです。日本や中国の各地で、特に女性の問題に関心を持って活動されている方々と時間を共に過ごせたことは、私にとって本当に貴重な経験でした。実は旅の直前まで、「日本人ファースト」のスローガンに象徴される排外主義の空気に傷つき、日本語を使うことさえ難しく感じる時期がありました。しかし、今回の旅で真剣に歴史と向き合う日本の方々の姿に触れ、深くエンパワーされました。そして、自分の中にある加害者性とどう向き合うかという課題にも、新たな気づきを得ることができました。

私にとって今回の旅は、初めての中国訪問でもありました。皆様と共に歴史の現場を歩いたこの記憶は、今後、中国との友好と平和を考える上でも、忘れられない原点になると思います。今回は時間の都合上、各博物館の展示をすべて詳しく見ることはできませんでしたので、ぜひまた南京を訪れたいと願っています。来年の目標の一つとしていた中国語の学習にも、より大きなモチベーションができました。そしていつか、私が以前勤務していた韓国・ソウルの「戦争と女性の人権博物館」にも皆様をご案内し、再び平和について語り合える日を楽しみにしております。

最後に、このように意義深く貴重な機会を設け、入念な準備をしてくださったすべてのスタッフの皆様、改めて深く感謝いたします。そして日中両国の平和構築に尽力されている両国 YWCA の皆様に、韓国からの参加者として温かく迎えていただいたことに、心より御礼申し上げます。

---

H.A.

「南京を考える旅 2025」では、研究者三名による「対話」をテーマとしたパネルディスカッションや、南京大虐殺に関する大学教授の講演、侵華日軍南京大屠殺遇難同胞紀念館や南京利濟巷慰安所旧跡の視察、中国各地の YWCA・YMCA 参加者との意見交換など、多様な学びの機会を得ました。

参加を通じて得たことは三点あります。第一に、「違いを認識すること」の重要性です。参加前に日中戦争や南京大虐殺を学び、日本側の見解とその根拠を理解しました。現地では中国側の資料や語りにも触れ、被害者数など日本側の見解と大きく異なることを知りました。互いの主張と根拠を丁寧に認識することこそ、対話の基盤になると感じました。

第二に、「気持ちを向けて対話を続けること」の大切さです。加害の歴史を持つ日本人として議論に臨むことに不安がありましたが、中国参加者が「未来の平和のために話し合いたい」と前向きな姿勢を示してくれたことに深く感動しました。憎しみをもち込まず、建設的に語り合うことが、平和への一歩だと実感しました。

第三に、「人とのつながり」です。中国参加者や日本参加者との交流を通じて新たな友人関係が生まれ、互いに学び合い、応援し合える関係を築けたことは今後の社会活動の大きな力になります。

私はこの旅への参加をきっかけに YWCA に入会し、活動の意義をより深く理解しました。国際的なネットワークを持つ YWCA だからこそできる平和と連帯の活動があると感じています。今後は、

本業や所属団体での実践に経験を生かしつつ、YWCA の一員として平和構築と交流促進に積極的に取り組んでいきたいと思えます。

---

Y.K.

参加者とのコミュニケーションの中で、自分の中で「歴史事実と現代中国が繋がっていない」と気づきました。恥ずかしながら自分の差別する心を自覚しました。まだまだ勉強したいし考えていきたいです。スタッフと参加者の皆さんとの交流。みなさんの活動をも知ることができました。

● 今後に繋げる、どう活かすか

学び続けること、活動が続けることが「活かすこと」なのではと思っています。この旅だけで学びは完結しません。

この旅に行ったことで中日の歴史も現在について学びたいという思いが、より強くなりました。史実と現代とのつながりを可視化することが最近の自分のテーマです。私が歴史を学ぶ理由のひとつは、中国人の友人をもっと深く理解したいからです。同じ立場に立てなくても、同じ目線で世界を見てみたいのです。

この想いに共感してくれる人を集めて繋がり、少しずつでも政治的な話をしていきたい。歴史を記録したり学ぶのは、数字や出来事を暗記すること自体が最終目的ではなくて、重要なのは、隣人の世の中の捉え方を知ることだと感じました。

---

Y.C.

改めて歴史の事実と向き合い、未来を思考する旅のプログラムの意義と魅力を深く実感することができました。本や講演からの学びを超えて、共通の現場体験を持つことの豊かさを味わいながら、何よりもその体験を共有できる旅の仲間を得られたことは、今後に向けた大きな糧となりました。

過去の戦争の事実に向き合うことは、同時に、今まさに起こっている戦争や、日々の生活の中で生じる個人間の暴力、差別やヘイトなど、なくなる社会の構造的な暴力とどう向き合うか、自分自身の行動を問い直すことでもあったと感じました。

対立や傷つきに正面から向き合い、和解に向けた対話を促進していくこと——それが、これからの歩みに託された私たち一人ひとりの課題であると、今回の旅を通して強く心に刻みました。

時間をかけ、心を込めて丁寧に準備して下さった中国 YWCA の皆さんに、心より感謝申し上げます。



2012年の第2回以来、「南京を考える旅」に13年ぶりに参加させていただいた。初回から今回まで旅のコンセプトは一貫して変わっていない。日中各地から参加したユースが、美しい古都南京の街で出会い、同じ場所で同じ時間を過ごしながらか、講義やフィールドワークを通じて南京大虐殺という負の歴史と向き合い、そこから感じたことを共有し、同じ過ちを二度と繰り返さないために、自分たちに何ができるのかを語り合う。今回の日本の参加者たちも、旧日本軍による凄惨な殺戮や女性・少女に対する戦時性暴力の事実を目の当たりにして、心から血を流し、歯を食いしばる思いをしながら、その事実を受け止め、消化し、さまざまなことを感じ、祈り、誓っただろう。

この南京を"mind"で「考える」旅に、今回はアートや体験など、"heart"で「感じる」要素が多く取り入れられた。「共に平和の美しい絵を描く」として企画された日中 YWCA ユース平和アート展は、日中の YWCA に連なるユースに平和への思いと願いを絵画で表現してもらおう試みで、開会式には外で作品が一同に展示され、参加者はそれぞれの作品をじっくり味わうことができた。また、「共に平和の時代を思い起こす」として、開会式では日本 YWCA からの平和のメッセージを含む記念映像が流され、中国の空港に到着してから閉会式までの旅の記録動画が驚くほどのスピードで編集されて、送別食事会のレストランで披露された。特に若い世代には本を読んだり、人の話をただ聞くよりも、映像のほうにインパクトを感じ、心に刺さるだろう。最後の閉会式では「共に青春の華やかな章を歌う」としてボランティアのバンドメンバーの生演奏をバックに中国でも知られている日本の歌を日中混成チームが歌い、観客もスマホのライトを点灯し、ライブさながらのノリだった。

もう一つのキーワードが「体験」だ。今回は「サービス体験」として、事前に希望を聞き、南京 YWCA が運営する障がい者の家、知的障がい者の職業訓練と雇用のためのベーカリー、高齢者に総合的・専門的な支援を提供する在宅高齢者サービスセンターの3つの施設をグループごとに訪問した。それぞれのグループは担当者から施設の概要を聞き、利用者と交流し、簡単なものづくり体験をした。私が訪問したベーカリーでは、ビデオで障がいのある方々が誇りと生きがいを持って働く様子を知ることができた。また、紙に絵を描いて、それを缶バッジマシンでバッジにしてもらおうという楽しい体験もした。翌日グループでの分かち合いの時に、いつもはクールな中国 YWCA のユース職員が、障がい者の家を訪れて、知的障がいのある方々が手厚いケアを受け、生き生きと過ごしているのを見て感動したと涙を流して語っていたのが印象的だった。

絵画や音楽などアートには言葉を超えて人の心をつなぐ力があり、その場でしか出会えない経験は何物にも代えがたい。歴史に学び、日中の平和の架け橋となるという旅の根幹は変わらないが、時代に合った新しい要素も取り入れて、進化している「南京を考える旅」に一人でも多くのユースが参加して、学び・感じたことを周りの人に伝えてほしい。





## 「南京を考える旅 2025」報告書 ウェブ版

2026 年 3 月

編集・発行

日本 YWCA

〒101-0062 東京都千代田区神田駿河台 1-8-11

東京 YWCA 会館 302 号室

Tel. 03-3293-6121 Fax. 03-3292-6122